西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第13次調査報告書③

中越（なかこし）遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第13次調査報告書③

中越（なかこし）遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて、さらに12回にわたる調査を実施し、記録保存をはかってきました。平成５年度も、その第13次調査として、区画整理の第Ⅰ工区内の４箇所で発掘調査を実施しました。この報告書は、そのうちの、遺跡の範囲では一段低い、南縁の面で実施した発掘調査の記録です。

調査の結果、縄文時代後期の遺物包含層と土坑、平安時代の住居址１軒が発見されました。

このうち中越遺跡で２例目の発見となった平安時代の住居址からは、カマドを構築する際に芯材や火床材として使ったであろう大量の須恵器や土師器、灰釉陶器の破片が出土し、９世紀半ばのこの時期の貴重な資料を得ることができました。また縄文後期の包含層は、今回の調査地点が、昭和52年に個人住宅の建設に伴う調査を実施し、大量の縄文後期の遺物が出土した地点の東隣ということで、予想どおりといった面もありましたが、調査を通じて、包含層の南限や、分布の時期的な変遷を推定する手がかりを得ることができました。

幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により初期の目的を果たすことができたわけですが、特に、工期の関係などで冬のさなかに発掘をせざるを得なかったことから、宮田村遺跡調査会会長友野良一先生をはじめとする現場での作業にあたられた方々には、大変な苦労をおかけしました。それらの皆さんに改めて感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成６年３月15日

宮田村教育委員会

教育長　小林　　守

例　言

1．本書は、平成５年度に実施した、西原土地区画整理事業に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。

3．年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。

4．報告書中の遺構実測図や拓影図の縮小率はおおむね次のようにしてある。

遺構全体図……1/250　　住居址……1/40　　遺構細部実測図……1/20

縄文土器拓影図……1/3

5．平安時代の遺物については、平成４年度出土遺物と同様、県文化課の小平和夫氏にご教示を受けた。記して感謝する次第である。

6．本調査にかかわる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目　次

序

例言

第１章　遺跡の概観と調査の経過 …… 1

第１節　遺跡の立地…… 1

第２節　調査の経過…… 3

1　調査にいたるまで…… 3

2　調査の組織…… 3

3　調査の経過…… 3

4　遺物の分類について…… 4

第２章　遺構と遺物 …… 6

第１節　縄文時代後期の遺構と遺物…… 6

第２節　平安時代の遺構と遺物……10

○　257号住居址

第３章　ま と め ……13

第１章　遺跡の概観と調査の経過

第１節　遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇側部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約１㎞を測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある（図１）。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

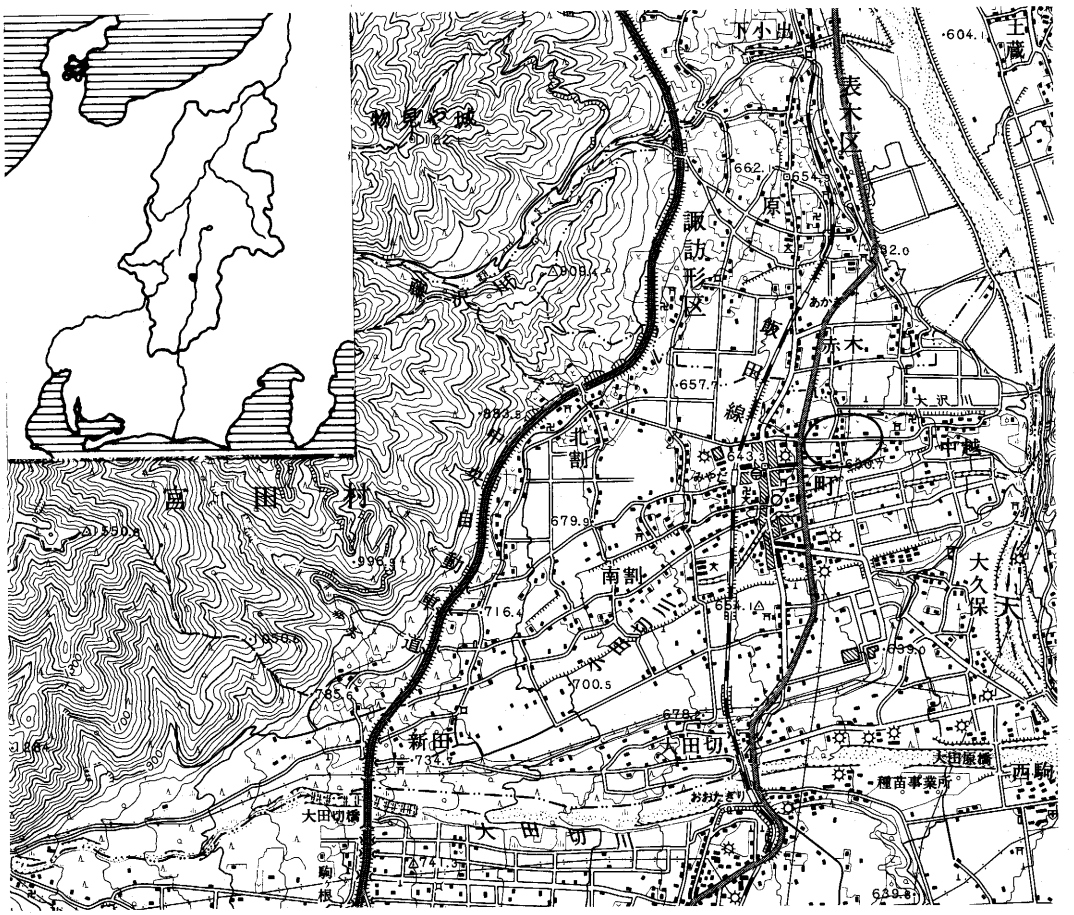


図１　位置図（５万分の１）

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐植土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定される。今回の調査は台地南縁の一段低い面で実施した(図２)。地目は１枚の水田で、耕作者の話によると、それほど古くない時期に、２枚であったものを整地し直したとのことだが、南の方が東方へ張り出している水田の形態から、本来、微地形的には南縁の方が高かったことが予想された。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐植土が厚い地点では、黒褐色土の上に黒色土が存在し、薄い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。薄い黄色土の下には、太田切扇状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が混じる砂礫層が存在しているのだが、腐植土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。調査地点の腐植土は厚く、黒褐色土の上の黒色土は北の高い台地面で見られるそれよりも、明らかに黒味が強い。植生を異にし、葦や茅類が繁茂していたことがいえる。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文前期の集落と台地南縁に連なる縄文中期の集落、

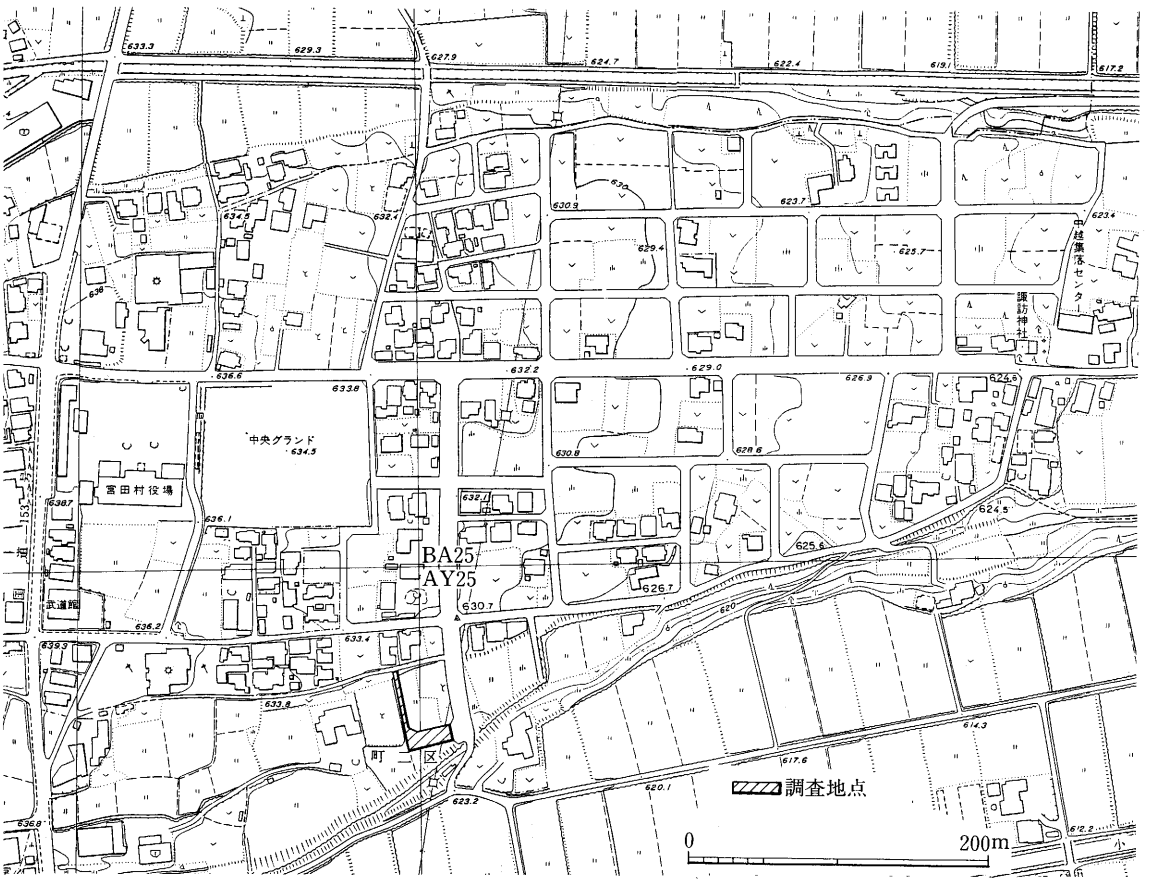


図２　調査地点図（「宮田村平面図」―平成元年２月作成―をもとに作図）

南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集礫遺構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

第2節　調査の経過

1　調査にいたるまで

昭和54年に策定された西原土地区画整理事業は、昭和62年に着工にいたり、現在も継続中であるが、それに伴って埋蔵文化財を保存する必要が生じたため、宮田村教育委員会では、宮田村遺跡調査会を組織し、発掘調査を実施して記録保存を図ってきた。

本報告の平成5年度3回目の調査は、第13次西原地区埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成5年12月27日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会長友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長小林守を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成5年12月27日から平成6年3月15日までを委託期間としている。

調査地点は、東西に広い遺跡の南縁の一段低い面の中央に新たに開設される、駅仲町線（村道3号線へ通ずる）の東端、幅12m、長さ約25mの範囲と、その西端から北へ伸びる道路の一部、幅3m、長さ約43mの範囲である（図2）。

2　調査の組織

今回の遺跡調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、整理を含めて実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会

会　長	友野　良一
委　員	片桐　貞治
〃	平沢　和雄
〃	青木　三男
〃	伊東　醇一
〃	唐木　哲郎
〃	加藤　勝美
教育長	小林　　守

◇宮田村教育委員会

教育次長	小林　　修
係長心得	原　　寿
係	小池　　孝

◇調査参加者

小田切守正
松下　末春
木下　道子
酒井　艶子
林　美弥子
西村アグ子
伊藤　茂子
平沢きくみ

3　調査の経過

調査に関する契約をとりかわしたのは先にふれたように12月末であり、ただちに現場での作業に入ったわけだが、シートの下に霜柱が立つような天候の中で、時間に追われ、充分な調査ができたとは言えない。

調査はまず西端の駅仲町線から北へ伸びる道路部分から開始した。北端から掘り始めたところ、北端に開田時に黄色土まで削平されてしまった部分がわずかあったものの、埋め土の下、旧表土下の黒色土から、縄文後期の遺物が大量に出土し始めた。遺物を取り上げつつ掘り下げ、遺構の検出に努めたが、発見したのは土坑2基のみであった。ただ、包含層下面を地形的にみると、東方向へ傾斜している台地面は北へ向かってもゆるやかに傾き、北端は幅の広い溝状となっており、結果として南縁の端部がわずかではあるが最も高くなっていることがわかった。ほぼ中央から土師器、須恵器、灰釉陶器の破片が集中して出土した地点は平安時代の住居址となった。縄文後期の包含層中から掘り込んで構築されていたことから埋土の範囲を特定するのに手間取り、壁の部分は大分削り込んでしまった。

駅仲町線の部分については、当初はまず用地の向きに合わせて東西向に3本のトレンチを入れ様子を見る予定であったが、北端へ一本目のトレンチを入れたところ、その部分で、縄文後期の遺物の出土を伴う大量の礫にあたってしまった。狭い範囲を掘っても性格を知ることができないと判断し、道路の北半分の幅6mまで調査範囲を拡大したところ、図3の南西の破線から南は極端に遺物が出土せず、東側も一点鎖線から南東は礫がなく、遺物量も減少する傾向が見られた。このことから調査範囲がほぼ包含層の南限であろうと判断し、結局、南半は調査しなかった。大量に検出された礫については、少なくとも人工的に集められたものではないと判断し、詳しい記録を取ることなく、およそ一ヵ月の現場作業で調査を終了させた。遺跡の性格等について一定の理解を得るだけの資料は収集したつもりであるが、調査しなかった範囲に遺構が存在した可能性も否定できない。

平成5年度は本報告以外にも広い面積を調査してきたため、現場作業終了後ただちに整理作業に入ったものの、時間がなく、今回の報告書に、遺物の実測図を掲載できるまでの充分な整理をすることができずに終わってしまった。平安時代の資料については、今後、機会を得て実測図を発表したいと考えている。

本報告の調査地点を、遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、AO・AP24～26、AQ23・24、AR・AS－23ということになる。

4　遺物の分類について

本報告書における遺物の分類は、「中越遺跡発掘調査報告書」（宮田村教育委員会1990）での基準と呼称をそのまま使用しているが、縄文後期の土器の時期区分については、「長野県史考古資料編（四）遺構と遺物」に従った。

また、遺跡地には、昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区の呼称は、グリッド設定当時のものでなく、「中越遺跡発掘調査報告書」（宮田村教育委員会1990）のものを使用した。

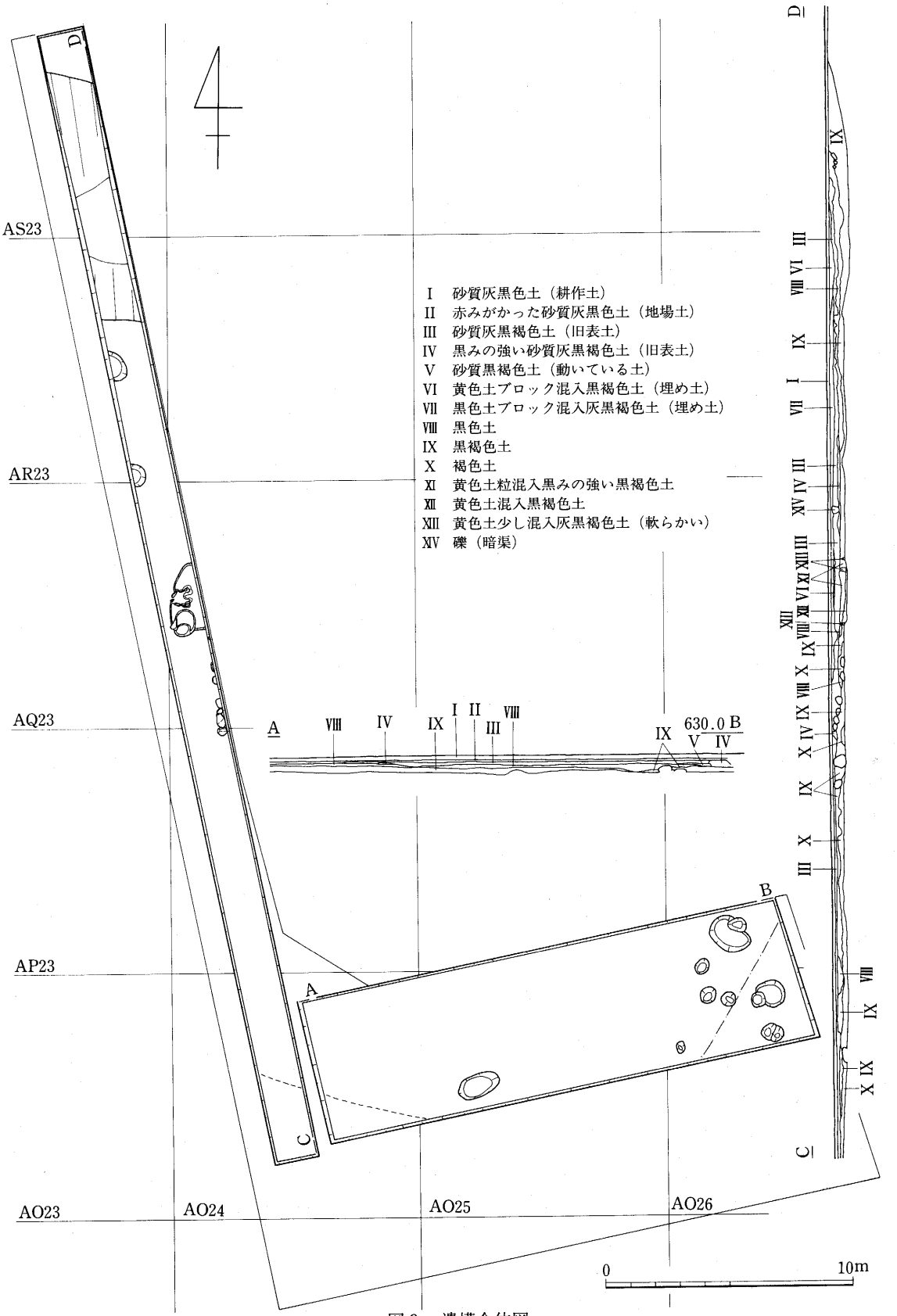

AS23
AR23
AQ23
AP23
AO23
AO24
AO25
AO26
D
C
A
B
I 砂質灰黒色土（耕作土）
II 赤みがかった砂質灰黒色土（地場土）
III 砂質灰黒褐色土（旧表土）
IV 黒みの強い砂質灰黒褐色土（旧表土）
V 砂質黒褐色土（動いている土）
VI 黄色土ブロック混入黒褐色土（埋め土）
VII 黒色土ブロック混入灰黒褐色土（埋め土）
VIII 黒色土
IX 黒褐色土
X 褐色土
XI 黄色土粒混入黒みの強い黒褐色土
XII 黄色土混入黒褐色土
XIII 黄色土少し混入灰黒褐色土（軟らかい）
XIV 礫（暗渠）
630.0
0
10m

図３　遺構全体図

第２章　遺構と遺物

第１節　縄文時代後期の遺構と遺物

１　包含層

水田耕作土の下には、水田化の時埋め立てた土の下に旧耕作土が残されており、その下は、黒色土、黒褐色土、褐色土を経て黄色味を増し、薄い黄色土を経て砂礫層となっている。包含層下面は「調査の経過」で詳しくふれたように南縁が最も高くて北東方向にゆるく傾斜し、北の高い台地との境の直下で、浅くて広い溝となる。溝の底に水が流れた痕跡は見出せなかった。

遺物の出土状態を層位的にみると、水田耕作土下の埋め土直下から、北側の深い方では黒褐色土まで、南の浅い方では褐色土まで出土したが、中でも、埋め土の下にある畑であったころの耕作土を除くと最上層となる、黒色土中のさらに上層部に集中する傾向が見られた。土器は、風化して脆くなった他の土器が含まれていることは否めないものの、いわゆる粗製土器が量的には最も多い。それらは小破片のためもあって後期の土器としか時期を特定することは出来なかった。時期的に細分可能な土器は後期初頭から曽谷・安行並行期までにわたり、晩期の条痕文土器が若干ある。後期のうちでは堀之内並行期が極端に少なく、主体は、加曽利Ｂ並行の新しい時期から曽谷・安行並行期である。上層がより新しい傾向はあるものの、層位的に分別できる状態にはなかった。ただ、包含層全体に、本報告に図示等はしてないが、下層により多い傾向をみせながら、初頭から始まる中期の遺物が少量出土しており、特に北の溝からは、包含層の下層に集中して一定量の出土をみた。溝の最下層は中期単独の包含層といってよく、その埋没開始時期が特定できよう。石器は、打製石斧21、横刃型石器10、凹石１、叩石２、礫端叩石２、敲打製石器２、礫石錘12、石鏃５のほか、粗大剥片類30、黒曜石類の剥片、石核、原石類が100近く出土した。時期による組成の変化までは導きだせなかったが、礫石錘の半数近くが縄文中期の包含層内からの出土であり注意された。軸に孔が貫通する紡錘形の土製品の一部が出土している。

２　土　坑

黒褐色土中に黒色土が入る落ち込みが幾つか発見された（図３）が、人の手によって掘られたと断定できるような遺物の出土状態等は観察されなかった。ただ、調査範囲の南縁に近い長円形のやや大型のものと、東端の小型の７基は、形態から土坑である可能性はある。

３　礫　群

礫群が遺構ではないと判断した根拠について記しておきたい。礫は調査した範囲全体から出て

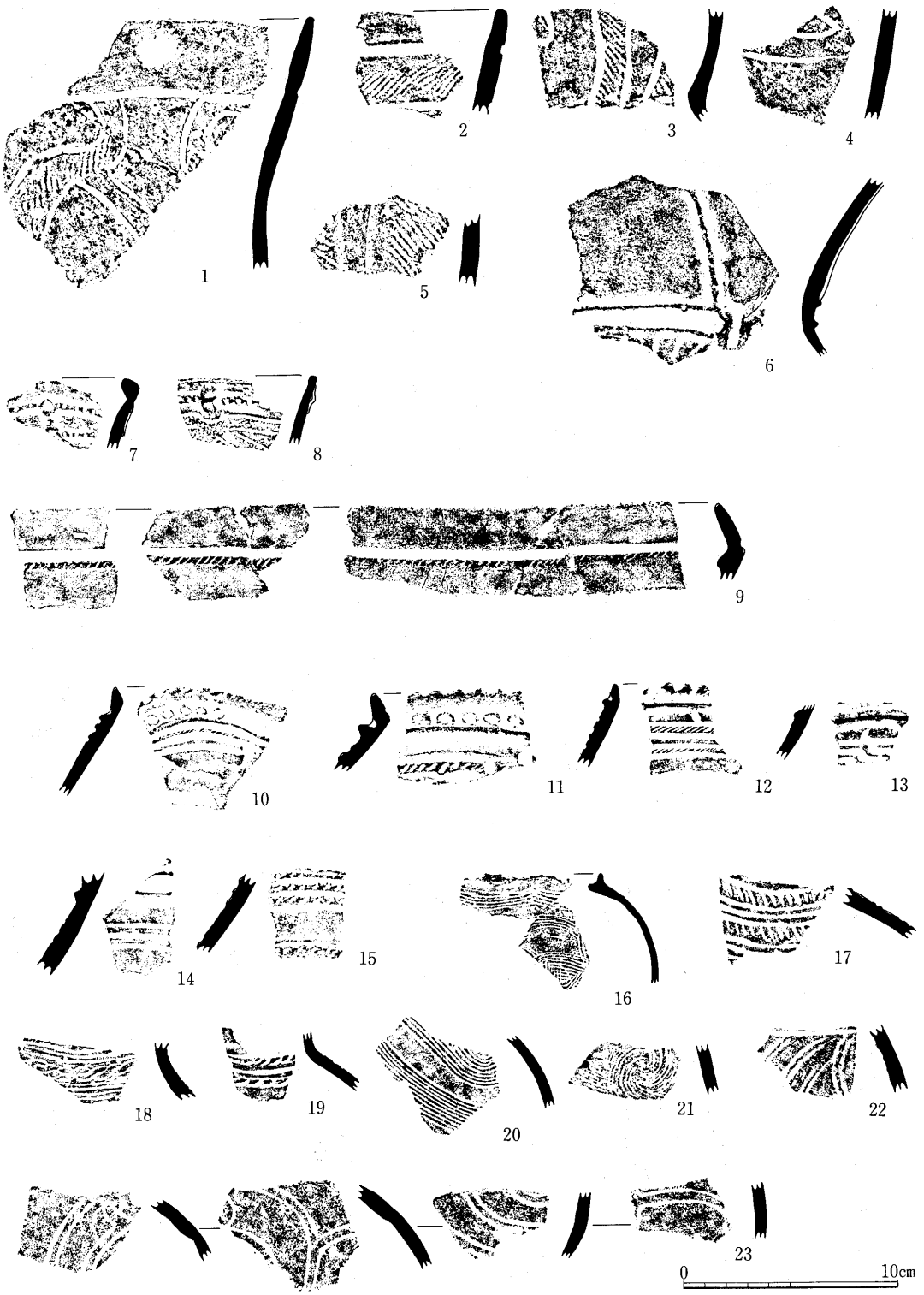


図 4　縄文後期の包含層出土土器拓影(1)

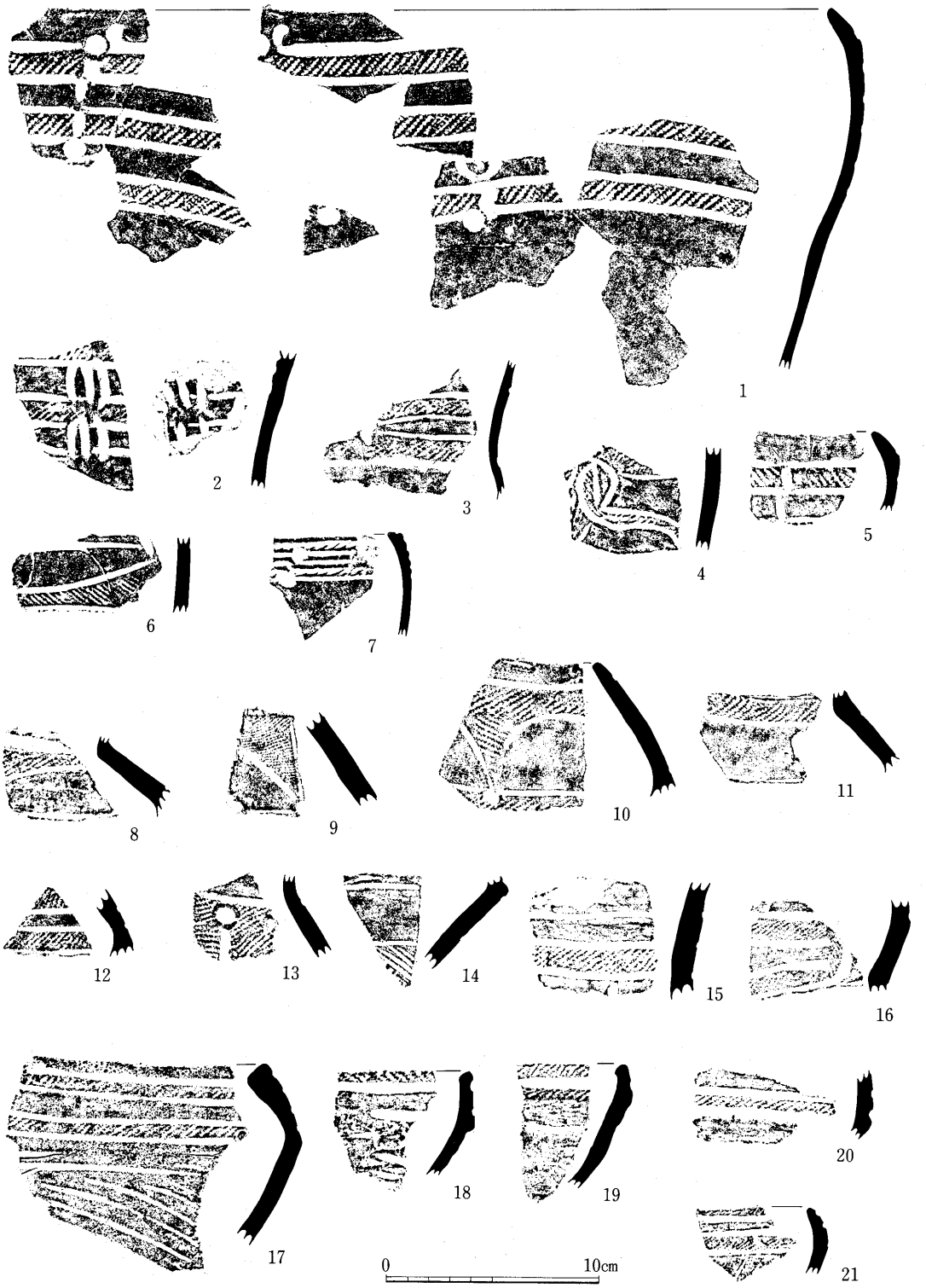


図５　縄文後期の包含層出土土器拓影(2)

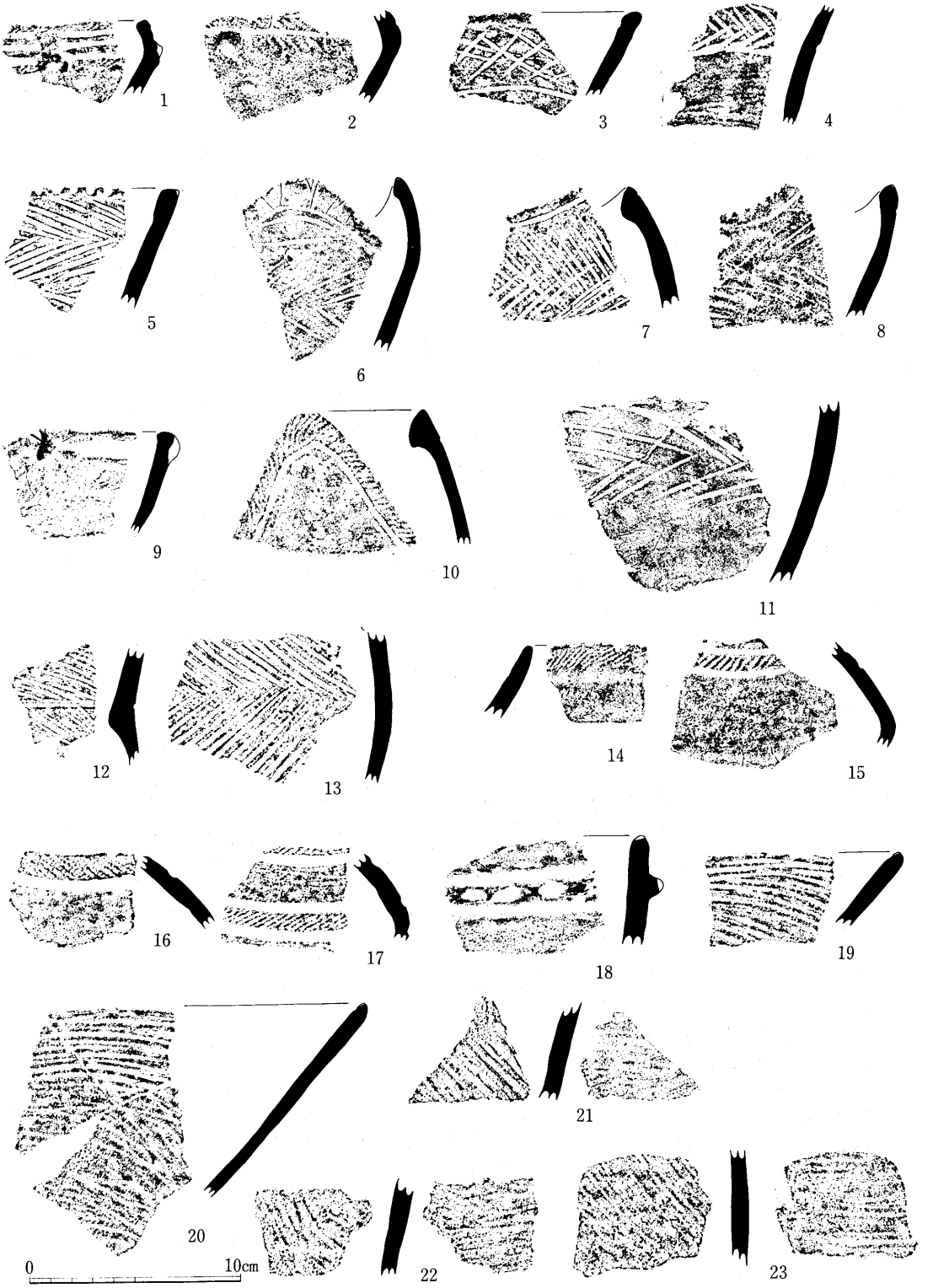


図6　縄文後期の包含層出土土器拓影(3)

いるが、中でも村道3号線の北半に特に多い。包含層下面が南東方向への傾斜を強める調査区の南東縁（図3の一点鎖線より南東側）は、分布の範囲外となる。

特に集中する台地南縁はもともと微高地であり、下層の太田切礫層が最も露出しやすい地点である。そして、包含層下面に達し、土の色が黄色味を強めてもなおその下方まで同質の礫が続いており(部分的に下まで掘ったところ、下は砂礫層といっていい状態であった)、それが集められたものとするならばあるであろう「礫を集め始める直前の地面」を特定できなかった。さらに、当然ながら礫の集まりには粗密があり、まばらな礫を取り除くなどして観察したのだが、結果としてできた礫の集まりに有意性を見出せなかった。以上のことから、今回検出した礫については、人工の遺構ではないと判断した。ただ、平安時代の住居址の南の用地東壁側の包含層下層に比較的平らな大礫があり、表土を重機で除土した時に掘り上げてしまったが、土層図をみてわかるように、付近の水田耕作土直下には丸い大礫が多数あった。礫層に達しない深さでの発見であり、平らな大礫を含めて、全体が何らかの遺構の一部である可能性は否定できないものの、今回の調査範囲だけでは結論を出すことができなかった。

第2節　平安時代の遺構と遺物

○　257号住居址

ＡＱ24グリッドに検出され、用地にかかる遺構の西側だけを調査した。平面形は西方向に軸線を置く不整方形で、短辺が2.7mと小型の住居址となろう（図7）。検出面からの深さは10cmと浅く、土層図によってもさほど深いとは思われない。床は中央部のみがやや粘土質の黄褐色土で貼ってあり、柱穴は発見できなかった。カマドは西壁中央の石組粘土カマドで、袖石は平らな石を立てて組み、火床中央に支脚石を立ててあるが、その回りを覆う土に混じる粘土質土はわずかであった。炉の内部には多量の土器がある。主な遺物の出土状態をみると、支脚石の奥側に立てかけるようにして須恵杯、底に敷き並べるようにして須恵甕と土師長胴甕の大破片、その上のしっかり焼けた焼土を隔ててさらに土師長胴甕の大破片や灰釉陶器皿片、袖石にかかるようにして須恵甕、さらに、風化の著しい右袖中央の石の内側を覆うようにして立て掛けた須恵甕などが目をひき、その外側にも厚手の須恵甕底部大破片がある(図8)。先の焼土以外に焼けた部分かないことから、火床に土器片を敷き、カマド自体も、土器片を芯にして構築されていたものとしたい。カマドの左手に切り合う2個のピットがある。

遺物はカマド部とカマド左のピット内、カマド右手の床面から出土した土器がほぼ全てで、灰釉陶器はＫ－14、須恵器は大型の水瓶と高台付き杯、土師器では長胴甕が主流である。このカマド付近を中心とする住居址埋土以外には平安時代の遺物包含層はない。9世紀半ばの土器群である。

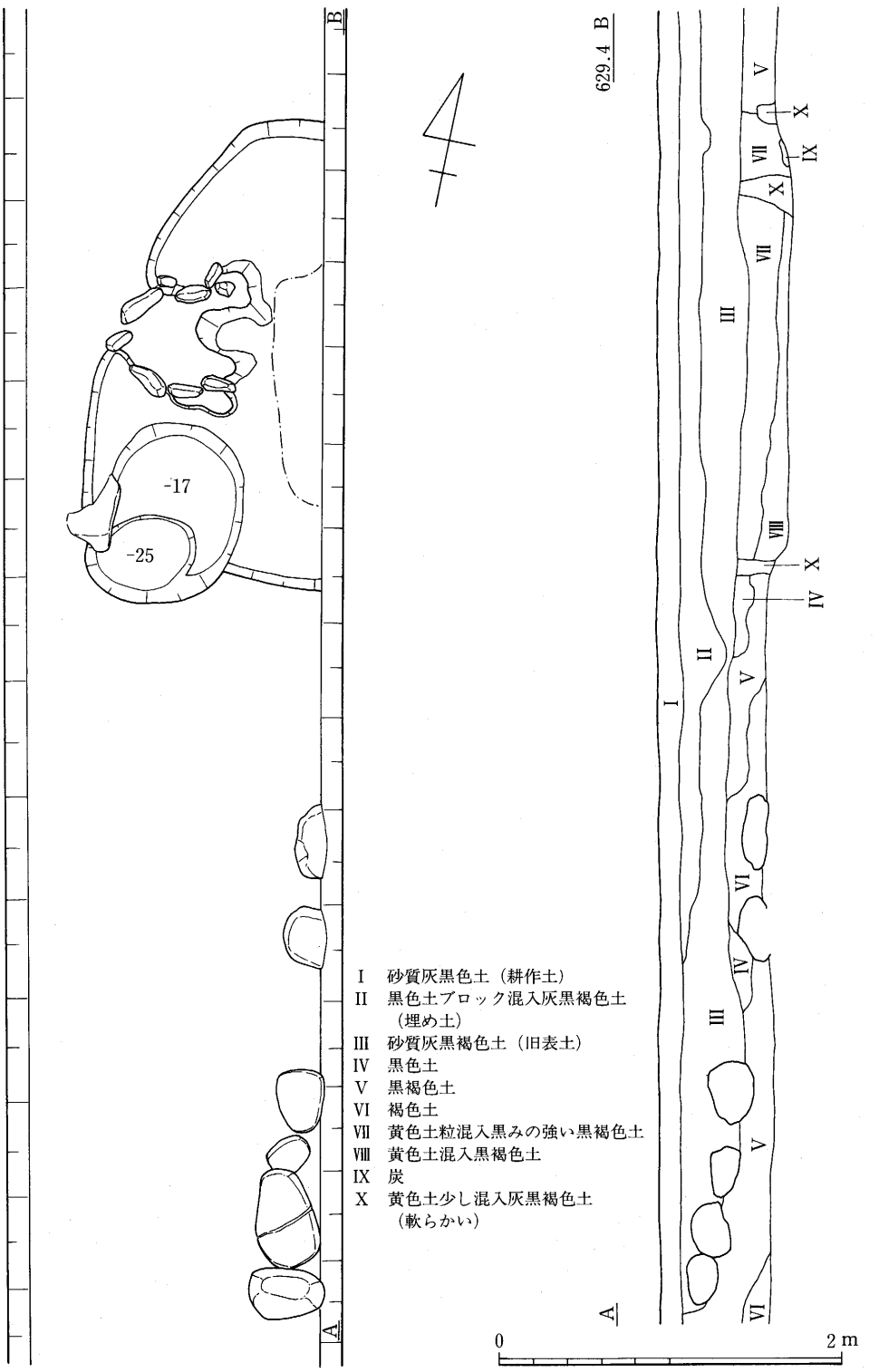


図7　257号住居址実測図

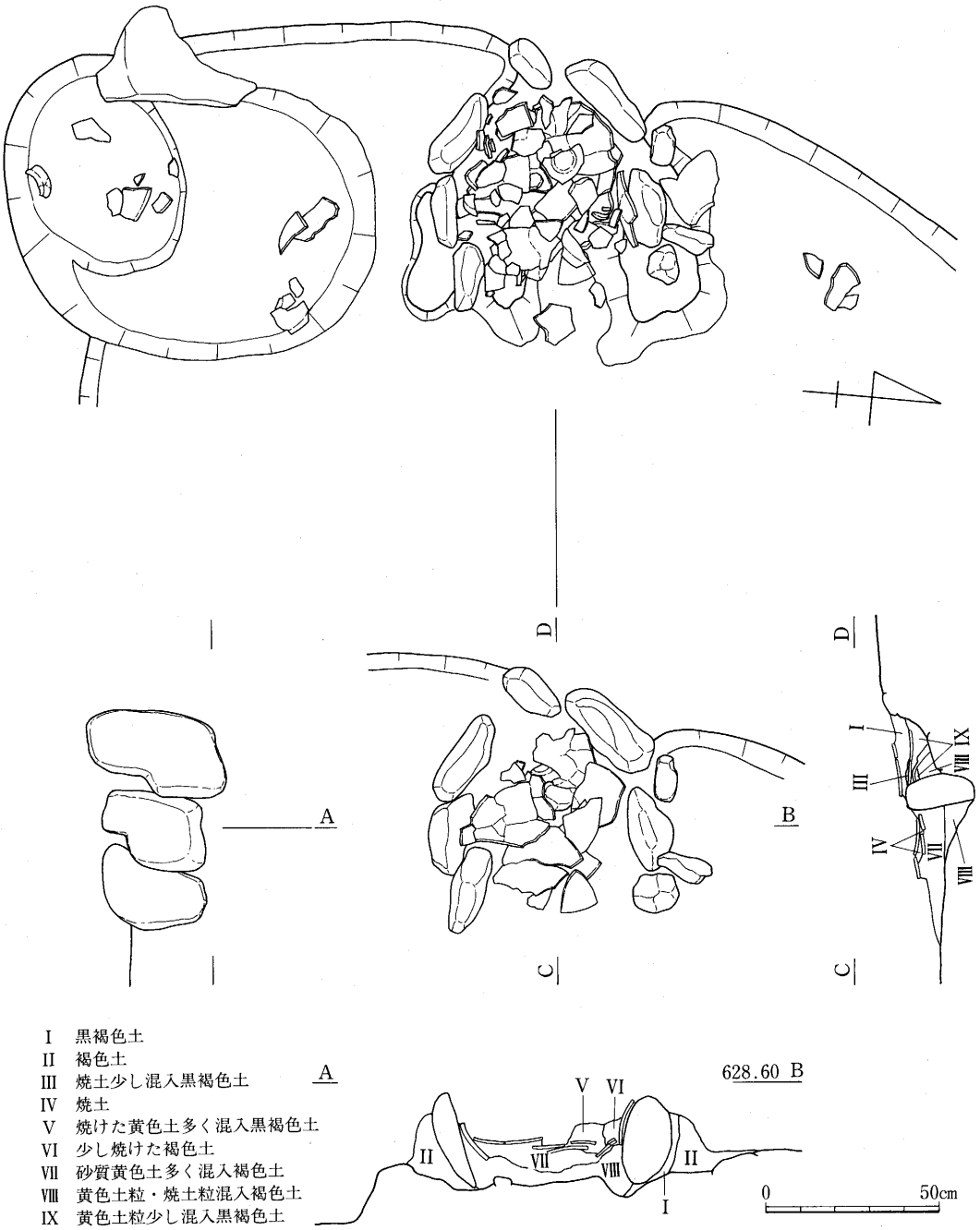


図8　257号住居址カマド実測図（上：遺物出土状態、下：火床と石組）

第3章　ま　と　め

縄文時代後期によくみられるような、竪穴住居や溝など、特定の窪みに入り込むのでない遺物包含層が、層位的あるいは平面的にどのような分布をとるかは、遺跡の性格によって異なるのであろうが、今回の調査地点では、上層により多く集中する傾向が指摘できる。このことは、調査地点が包含層の端に近く、遺物は、調査地点からみて斜面の上方すなわち西方からもたらされたことを示していよう。

昭和52年、今回調査した地点の西、水田を一枚隔てた地点で、堀之内式期から曽谷・安行並行期まで連続する遺物包含層と石棺墓を検出し(中越遺跡第6次調査)、一方東の村道37号線の改良部分では、縄文時代中期後葉の住居址を検出しており(西原区画整理事業に伴う第1次調査)、台地南縁の一段低い面に形成された縄文後期の包含層は、加曽利B並行期から東方へ移動もしくは拡大し、縄文中期の包含層の上まで広がったものと解釈できる。調査区北端の溝は、縄文中期から埋まり始め、後期を通じて埋没し続けており、遺物の出土層位から、縄文後期の終わりには溝は埋まってしまったのかもしれない。

平安時代の住居址は中越遺跡での2例目の発見であった。昨年の調査で、今回検出した地点の北東約90mの、上位面の南縁で9世紀末の住居址を、平成2年度の調査で北北東約100mの地点で10世紀に入るピット1基を検出しており、9世紀半ばに比定される今回検出した住居址は、中越遺跡の平安時代の遺構の中では最も古いことになる。

今回の発掘は、まさに厳寒期の調査であった。日の傾いた夕方、写真を撮影するために清掃した遺構上に、みるみるうちに白い霜柱が成長していく様を見たことも一度ならずあり、作業にあたられた皆さんは、さぞやつらかったのではと今にして思う。そんな作業員の皆さん、現場の指揮にあたられた友野良一先生に感謝申し上げ、まとめとしたい。

写真図版

3号線調査状況

3号線北端包含層下の状況

図版2　遺構

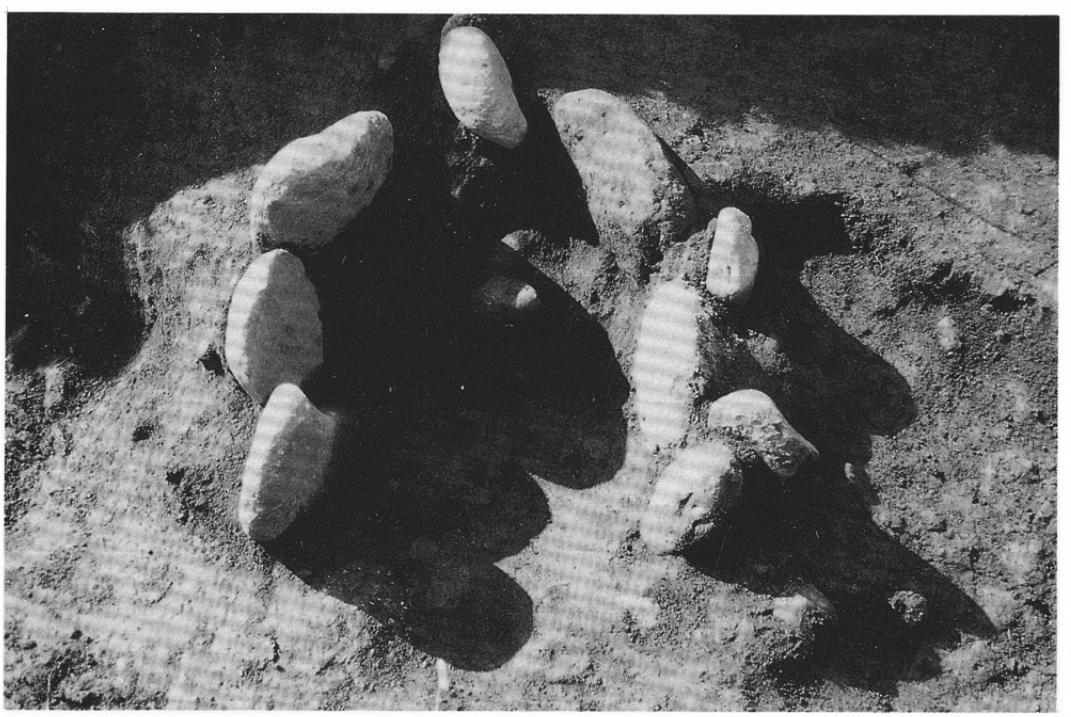
駅仲町線北半調査状況

駅仲町線北半調査状況

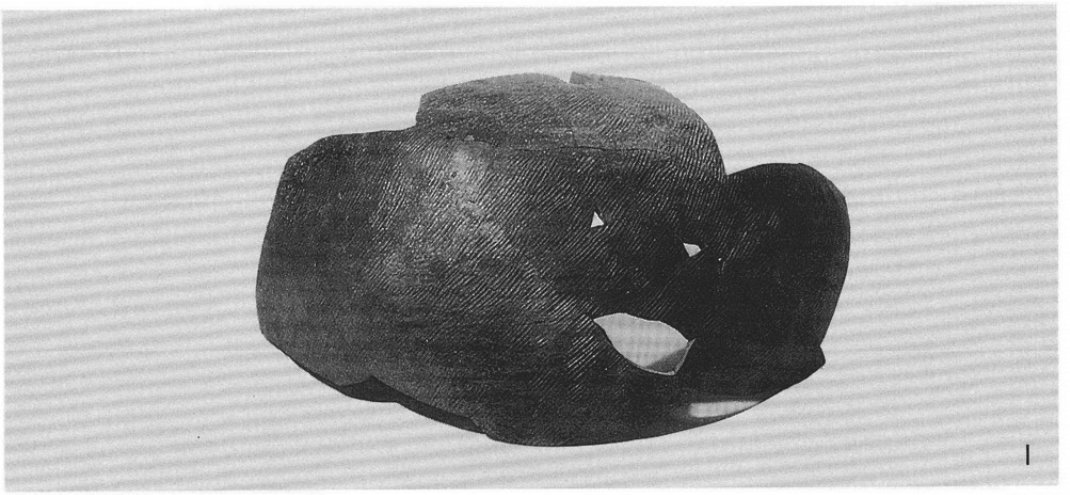
257号住居址

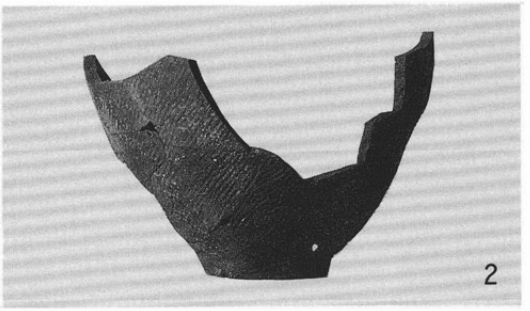
257号住居址カマド（北より）

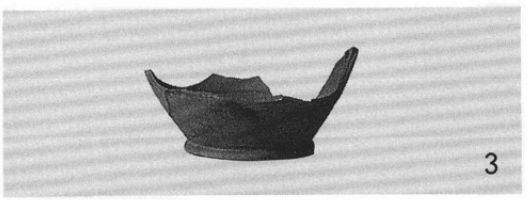
257号住居址カマド火床

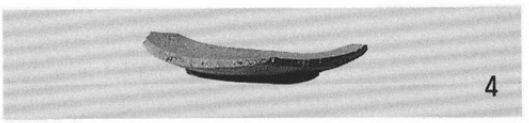


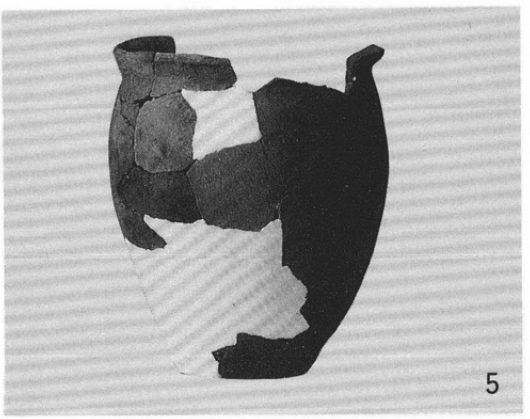
257号住居址カマド石組

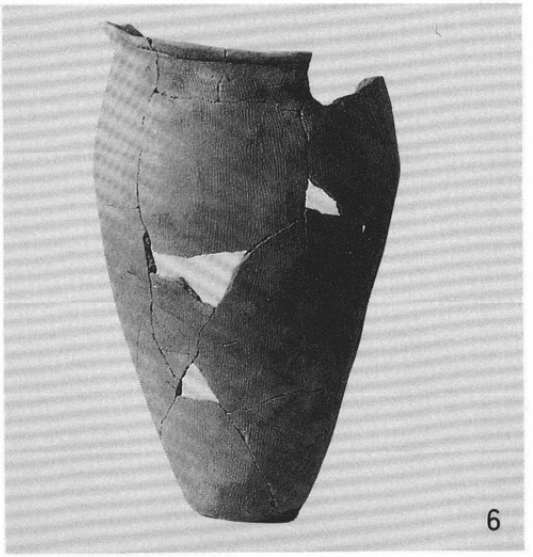


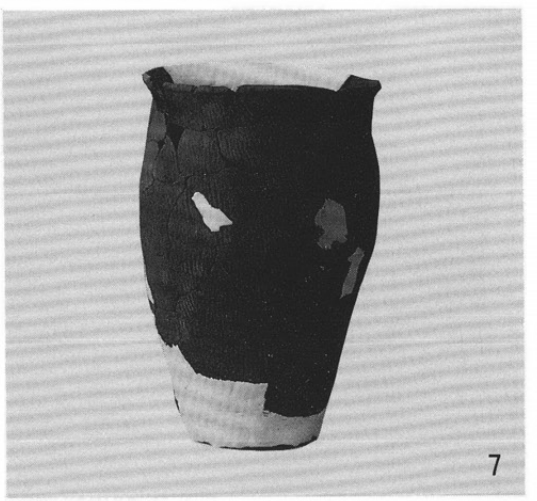












257住（1～3　須恵器、4　灰釉陶器、5～7　土師器）

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区
第13次調査報告書③

中越遺跡

平成6年3月15日　発行

発　行　宮田村遺跡調査会

印　刷　ほおずき書籍㈱
長野市柳原2133-5